

カンガルー キツネ セントバーナード、そして象

カンガルーの赤ちゃんを育てて

井深 私は、教育だろうが愛情だろうが、動物相手の方がどうも本物だって気がしてるんですよ。本物がたくさんそこで発見できるというような気がするんです。

畑さんはいつ、どこから動物とのふれ合いというものがスタートしたんでしょうか。

畑 私の場合は、おやじが非常に動物好きでして、医者だったものですから。少年時代に北満の開拓団に連れて行かれて…。

井深 北満ですか。大分苦労されたんでしょうな、お医者さんで。

畑 30戸くらいしかないんですね、家が。小学校は1、2、3年が合わせると10人くらい、クラスが2つしかないんですね。授業というのは余りないんです。釣りとか、外に出ることの方が多かったもんですから、自然と外の生活が好きになったんじゃないかな。ところで、コンラート・ローレンツさんのインプリンティング説ですが、最近私はずいぶん疑問を持つようになりましたね。

井深 賛成！インプリントはあるかもしれないけど、その前奏曲というのか、母鳥が卵を突っつく、ひよこが卵のなかから打ちかえす、そういう前奏曲があって、始まることだと思うんですよね。ローレンツさんはプログラムだということからでね。

畑 ぼくは動物の脳のメカニズムというのは、ある程度、下等動物から高等動物まで、自然のしかけるしかけていうのは似通ってるんじゃないかと。それで鳥類だけにああいう非常に、一風変わった、くつきりした反応が出てくる。しかも非常に限られた鳥類だけに出てくる。それが非常に疑問だったんですね。哺乳動物、特に私はネズミから始まって、熊とか、馬とか、牛とかいろんなものを育てるわけですね。そうしますと、すりこみだけでは説明がつかないで悩んでいたんです、ずいぶん。あるときオーストラリアを旅行しました。そしてへんぴな田舎に行った時、夕方でしたけれども、斜面に立たずんでいましたら、野性のカンガルーの一種ですけども、ワラビーっていうんですが、ひよこひよこ下りてくるわけですね。小さなカンガルーですがね。山から下りてくるのは、人間の住んでいる近くにやわらかい草があるんですね。あれは夜行性だからそれを食べに下りてくる。じっと見てたわけです。仲よくなりたいと思いましてね、両方のポケットにいっぱいのパンを入れてまして、その晩少しずつ投げてやる程度にすましたんですね。翌日また行きまして、座ってたら、今度は手からパンを食べるようになった。そのなかにメスのワラビーがいました。おなかに赤ちゃんを持ってるんですね。大抵の野性動物は赤ん坊を持ってる時期は非常に脳が興奮状態になりまして、1つの興奮がいろんなセンターにいきやすいんですね。だが

らぼっと興奮しますと、攻撃の反応とか、そういうところにどんどん行動が…。

井深 火がついていくわけですね。

畑 はい。ちょっと心配したいんですけども、そっと頭なげてやったんですね、赤ん坊の。そしたらさわらせるんですよ。で今度、赤ん坊を引っぱり出したんです。親はなんともしないですね。

井深 ああ、もう生まれてだいぶたっておなかに入っちゃってるわけ。

畑 はい、もうりっぱな赤ん坊。それで何もしないわけです。赤ん坊をこう持ちまして、ひょっと返してやったら、袋の中に自分ですぼんと入るんですね。そのときにはっと気がついたんですね。犬でも馬でも胎児のときには、これを母親は認識できないんです、子供の存在を。

井深 生まれるまで、そういう考えは持ち得ないということ？生まれたときに初めて発生するというわけですか。

畑 ええ。それで“これまだ胎児なんだ”とわかったんです。それからまた旅行して行ったんです。そしたら道にカンガルーの死体がある。向こうの車はカンガルーフェンスを持っていて全部はね飛ばしていくわけです。大体3キロに1つぐらいカンガルーの死体がおこってるんです。その中に子供がいることを私は願っていたんです。そしたらやっぱりめぐり合わせまして、赤ん坊がいるんですね。母親は頭碎かれてましたけれども、赤ん坊は生きてる。すぐそれを引っぱり出しまして、そしておしりをなめてやりまして、排便、排尿をなめ取ってやりまして、哺乳して、ぼくは胸元に入れて旅行したんです。ところが私が呼びましても絶対来ないのですが、胸の入口を見せるとびゅっと入ってくる。つまり母親が何かというイメージがそのカンガルーの子にはまだないんですね。シドニーの動物園に行きましたら、やっぱり飼育係でカンガルーの子を連れているのがいるんですね。麻袋にこれくらいの穴を開けて、そこからきゅっと顔を出しているんですね。引っぱり出しますと、その青年がかわいがるんだけど、全然コミュニケーションができないんです。それで穴を見ると、すっと入っちゃうんです。

井深 あれどのくらい入ってるんですか。1年ぐらい入ってるんですか。

畑 いや、そんなに入ってませんが、つまりカンガルーの子にとりましては、穴が世界であり、母親にとって“それはかわいがる必要のない胎児じゃないかな”ってそういうふうに思ったんですね。そういうことからずっと考えていきますと、動物の子で胎児期というのを、生まれたあとも考えなきゃどうしようもない、ということに到達しまして、そうすると私の周りに起こってること全部が、ずっと整理されて並んだ感じがしましたね。たとえばシカの子、シカが草原で子供を産むんです。産み落とすと親はいなくなるんですね。

井深 すぐですか。

畑 はい。頭でぎゅっと押しつけまして、座らしておいて、いなくなるんです。その時期はシカの子ににおいがいいんです。それで犬はそれを発見できない。

井深 哺乳しないんですか。

畑 哺乳は1回します。ですけどもいなくなる。とにかく採食に行くわけです。食事取りに。群と一緒にいまして、5時間ぐらいたちますとまた帰ってくる。ぱっとお乳飲まして、またいなくなる。

“一対一対応”の新説

井深 私、人間社会で一番忘れられているのは、離乳、乳離れの時期だと思うんです。これ、動物からもっといろんなケースで乳離れっていう、生理的乳離れといったようなものが、いつどういう形で行われるっていうのもっと知らせてほしいっていう気がするんですがね。本気で考えないと過保護の人間ばかりできちゃうんで、いまのシカのお話は、生きていくために、そういう経験に遭わせなきゃうそなんですよ。

畑 はい。1週間くらいそうなんです。

井深 1週間おっぱいやって、それで離しちゃうんですか。

畑 いえ、その時期は要するに胎児なんです。

井深 胎児と考える、という？

畑 胎児期と、同様に考える。生まれて、2日か3日、そばへ行きましても見えないんです。さわっても全然平気なんです。きょとんとしています。つまり人間が行っても、犬が行ってもこがわからない。つまりまだはっきりした胎児なんです。それが1週間たつとピリピリしてくるんです。ぼくらが行くとはね回って逃げちゃうんです。

井深 人間にとっても、意識前の学習と、意識後の学習ってことをはっきり分けなきゃいかんと思うんです。われわれは4歳、3歳以前の記憶というのは何もありません。そのときにわれわれは日本語でも何でも自分の生きる術でもすべて身につけてるわけなんですよ。だからその意識前の学習っていう、意識前というのは何ぞやというのが、動物からもちろん年齢換算しなきゃならないけど、ちょうどおっしゃった胎児という考え方ね。それをひとつもっとはっきりさせて、勉強する必要があるような気がするんですがね。

畑 馬もそうなんです。馬も産み落としまして約1週間というのが私にはなぞだったんですね。

井深 でも、ついては回りますね。子馬は。

畑 ええ。しかし非常に人間と仲よくなるんです。それは刷りこみだ、インプリントだ”という人がいたわけですね。ところが1週間、親と子馬と私と馬房で暮らす。私は寝袋を持って行って一緒に寝ますからね。それが1週間たつと子馬が逃げ始めるんです、私から。

井深 そうですか。インプリントの逆ですね。

畑 はい。つまり母親との(ぼくはそれを一対一対応と名づけているんですが)要するに親との一対一対応ができる時期が…。

井深 きずなですね。

畑 はい。それが動物によって違っているということなんですね。ですからカンガルーの子も出まして、親のそばをはね回り始めて…。

井深 初めて母親と…。

畑 母親は子に対する非常に強い関心をかき立てられる。こちらは母親に対して非常に強い関心をかき立てる。それで初めて一対一対応ができちゃう、ということに気がつきましてね。それからいまインプリンティングに対する考え方を少し洗い直してるところなんですね。

井深 なるほど。それから、ヒツジやヒツジの子を、産まれてすぐ母親から引き離して、1時間たってもとへ戻しても、母親は受けつけない、とか…。

畑 いいえ、受けつきます。

井深 ああ、そうですか。相当いろいろな例を挙げられてるんですけど、そんなことはないですか。

畑 受けつきますね。あれも離し方なんですよ。

井深 人間の場合のお産の過程、産まれてくるとい認識を母親が持つか、持たないかで、生理的な影響をいろいろ…。赤ちゃんが母親を動かすんだ、という考え方に、非常に賛成してきてるんですね。ごく最近では赤ちゃんが生まれると、胎盤を切らない前に母親に抱かせておっぱいを与える 何か1つの重要な意味を持たされているような気がするんで、その1つの例として、私はヒツジの話を、大変尊重してたんですけどもそうですか。

畑 はい。私どもでは1回お産のときはずしちやいますんでね。与え方じゃないんでしょうかね、お産した場所が生活域じゃないとか。ただ、お産したのがずっと長年使ってるヒツジの畜舎で、ヒツジのふんなどで汚れててというような…。

井深 においですね。

畑 ええ、そういうのがあるところにまた返してやれば受け入れると思います。

井深 違ったにおいを、消毒液かなんかつけてきたら、これは受け入れられないかもしれないですね。

畑 はい。人間がどういう手のつけ方をしたかっていうことも問題だと思うんですね。

井深 ああ、そうですか。一般論じゃないですね、そうすると。

畑 はい。一般論じゃないと思います。人間にも胎児期というのを私、考えなきゃいけないと思う。人間の赤ん坊でも生まれまして、しばらくの間はだれでもいいんですね。しいて母親である必要ないんです。

井深 それは絶対じゃないですよ。だれが扱っても同じですよ。

畑 ところがある時期、たとえば4ヵ月とか、6ヵ月の時期になってくると、突然人見知りし始めるんですね、赤ん坊が。

井深 うん、それは、ほんとの肉親の母親でなくたって同じことでしょう。

畑 肉親であるなしにかかわらず、その時期に私は赤ん坊が母親に対する対応を持ち始めると思う。

井深 それはそうだ。肉親ということとは別でしょう。だから私は、これは繰り返して顔見てる、繰り返してだっこされる、繰り返して子守り歌聞くとということによって、繰り返しによっ

て…。

畑 そうでしょうか？

井深 私はそう解釈するんですけどね。

畑 私はなんか劇的に…。

井深 それはちょっと…。

畑 そうでしょうか。

井深 それはまず3、4ヵ月というのは、赤ちゃんが非常に豊かな反応表現を示し得るときになるわけなんです。だからそれまでに愛着の観念を持ってるかどうか、人見知りっていうのは、もうちょっとしさいにやっていかなきゃならないんですけどね。人間というものは、あるいはチンパンジーってものは、いついつになったらどうなるんだ、という、ローレンツさんはそれ式なんですよね。プログラムとされてて、そういうことになる、と。人見知りなんてのは、私は全く環境によって、お母さんとおばさんとがかわりばんこに接していったら、お母さんだけへの人見知りなんて起こるわけない。どっちだってもかまわない。ワーワー言う家族がたくさんもしいたら、これはよそのおばさんがぼかっと来たって、ほんとの人見知りってようなものは起こらないんじゃないか。現に私も大分データ持っておりますけど、起こってないんですよ。

畑 それはそのとおりだと思うんです。だけど1つの脳の問題を考える場合に、ティピカルな例ですね。やっぱり考えていくというのが、生物学の方でもね。だと私は思うんです。

井深 だけどね、ティピカルだけでも、環境次第で、赤ちゃん生まれてだれにも接しないで置いておいたら、これはばかになっちゃうし、しゃべれなくなっちゃうし。だからそういう問題は環境次第でどうにでもなる、そういう性格というものを、すべての動物ってのは持っている。

畑 それは全部持ってます。

井深 そこが私はローレンツさんの気に食わないところなんです。

畑 それは確かにそうです。

井深 どんな動物だって生まれたときから人間が養ったら、これはその動物じゃないですよ。

畑 ぼくはそう思わないですけど。たとえば野性動物なんかを見る場合、人間の手を加えない野性動物の姿が絶対真実なんだという見方をされる学者は、動物の真実、自然の秘密を知り得ないですね。

井深 そうですか。タッチできないってことですね、われわれは。それはおもしろい理論だな。それは可能性ですか。可能性を知り得ないってことですか。

畑 ということだと思いますね。たとえば私はキツネの性格について非常に疑問を持ったんですよ。キツネというのは、ご存じのように人を寄せませんね。近寄せないんです。非常に小ざかしい、敏感な生き物として…。

井深 だますとか、非常に悪い印象を与えていますね、人間には。

畑 これは天性の問題だと思う。一体、キツネというのは、ほんとうにそういう性格を親にも

らってるんだろうか、ということ考えたことがあるんです。それでキツネを、(いま 30 匹ぐらいいいんですけども) 10 年間手元で飼いまして、去年から、キツネが出産のときに人を呼びに来るようになったんです。それで出産を全部見せてくれるんです。そういうふうになったんですけども、おもしろいことに、知床の深山でキツネに会いますと、キツネは非常に人なつっこいんですね。

井深 人に接してないから……。

畑 はい。ところが人家に近いキツネほど敏感なんですね。これがわかったのは、うちの床下にキツネが住んでおったときです。これは床下なんで、人の近くなんで人になれると思った。そしたら全部逆なんです。子供を穴の中で産みますけど、子供が穴から出られなくなって、子供は穴の中で餓死しちゃった。というのは、穴の中というのは非常に暗いんですね。明るい光の中で育てば、非常に明朗なものになるのが、穴の中で育つもんですから、おどおどしちゃうんです。山の中では穴からどんどん出てくるわけですね。平和なわけですよ、若い日には。だからそこらじゅうで日の光を浴びてちょろちょろして、母親が呼ぶと穴の中に入っていくわけです。人家の近くでは穴から出られないですね、夜しか。ですから非常にキツネが敏感になる、ということがまずわかってくるんですね。それじゃ、キツネの最初の子供はどうかと思ったんです。この場合、キツネの子を穴からとっても、母親からとっても、全然何のことないですね。それは胎児期なんですね。だから穴で産む動物というのは、あれ“子宮”なんですね。だから子宮から出てくる時期があるんですね。その時期に性格が決められると考えると、おっしゃる環境というものと、非常に結びついておもしろくなると思います。

明るいキツネ、暗いキツネ

井深 キツネの話をもうちよっと……。私の伺いたいことは、性格ってものは、ほんとに生まれたときから、身について持って生まれたものなのか。または、外からの環境によってか(まあ、基本的な問題はちょっとあるかもしれないけど、相当大きなパーセンテージのものが後からの)。そこら辺をどういうふうに読んでおられるかということをお教えいただきたい、性格ってものを。

畑 基本的にはやっぱりキツネはキツネなりの性格はありますけれども……。

井深 性格ですか、習性ですか。

畑 性格ですね。

井深 性格もやっぱり持っておりますか。

畑 持っております。

井深 その性格ってことを、少しもうちよっとかみくだいて……たとえばずるいとか、すばしっこいというのは、これは性格じゃないですね。

畑 そうです。持って生まれた……。

井深 ずるいとか、人をだますというのはおかしいけど…。

畑 たえばこういうふうになるということはいかがでしょうか。明るいか、陰気なとか。

井深 ああ、そうですか。

畑 そうすると穴から出る時期に、明るい光を与えてあげたキツネは明るい性格になる。

井深 ああそうか。その胎児を脱するときに。

畑 そうです。非常に暗いところで、ほかの生物とあまり会わせない、密閉された空間で育てますと、陰気なキツネになる。これははっきり言えると思います。

井深 そうすると、性格ってのは環境によって、相当大きく動かされると、そう読んでいいわけですね。

畑 はい、私はそう考えます。タヌキもそうだったんです。それから野犬の問題がそうですね。大体 60 日から 120 日までが犬の勝負の時期なんです。

井深 いわゆる胎児ですね。先生の言われる。胎児期。

畑 はい、生まれてから胎児期を脱する時期。60 日から 120 日の間が非常に犬にとって大切な時期なんです。この時期に人に会わせない、ほら穴で育った犬は絶対人を近づけないです。人を見るとうなります。かみつきます。これは犬じゃないです。狼です。これは名古屋の獣医学会で私が話したら、獣医さんたちもみんながそのとおりだと賛成してくださったんですけども、その時期が、犬が社会を知り、精神を大きくしていく時期じゃないかなって思っています。

井深 その胎児期という考え方、もうちょっといい言葉ないですかね。

畑 ですから私がそう申し上げたのは、動物によっては非常に完成された形で…。

井深 人間が最たるものですよ、そのだめな方の。そうすると人間の胎児期は…。

畑 非常に長いと思います。

井深 どれくらいと考えられますか。

畑 4 ヶ月ぐらいあるんじゃないかな。

井深 4 ヶ月ですか、もっと長くないですか。人間は早産の、そのハンディキャップもあるでしょう。だから 1 年越してから、まだあなたの言われる胎児期ってのはあるんじゃないですか。そういう考えをすると。

畑 しかし一対一対応も、7、8 ヶ月になったらかなり…。

井深 やることはやりますね。まあ、これは環境によるあれだろうけども。そうすると胎児期ってものが、非常にはっきりしてる動物というのは…。

畑 人間が一番はっきりしています。それから穴の中で産むものですね。

井深 穴の中で…。

畑 はい、タヌキ、キツネ、犬、フクロウ、そういうのは…。

井深 犬もそのうちに入るわけですね。

畑 入ります。狼が非常に顕著なんです、狼は犬より深い穴を掘ります。毎年改築していきまして、いい産室で子供を産むわけですけども、去年からアラスカに 7 回通いました。

狼と犬の違いをみるために…。

井深 それで不思議なのは、子供を妊娠するとか、子供を将来持つという意識は何らないわけですよ。それで産室を改善するというモチベーションは一体何なんでしょうね。本能ですかね、やっぱり。

畑 ええ、それと自然には自然の猛威がありますんで。たとえば私のところで最初に…。

井深 先生のとどこですか、いま。

畑 北海道の東の方の浜中というところがあります。根室の近く。そこで最初に私が育てましたキツネの夫婦は、最初の年、予期せぬ嵐がありまして、産室が浸水しましてね。全部死んじゃったんです。翌年、ちょっと上に産室をつくったんですね。

井深 自分でつくったんですか。

畑 はい。自分で、もちろん。それで翌年はきれいに育てました。ですからキツネにとりましては、巣穴は財産なんですね。ですから自然の中でも、歩き回りますと、キツネが穴をつくる場所はごく限られてます。

井深 子供が成長したらどうするんですか。

畑 子供は追い出します。

井深 巣別れですか。

畑 はい。最近の観察では、最後の子供のときは、雌を残して譲る、という観察例ができてきたんですね。これは非常に神秘的なんでね、にわかに…。

井深 ストーリーになりますね。

畑 一般化はできませんけれども、そういう観察はあります。

井深 おもしろい。人間味があるね、これは。

畑 ただし、キツネの場合は、野性ですと4歳というのはなかなかないんですね。人間が飼いますと、十何歳まで生きるんです。だから非常に野性の生活っていうのは厳しいんですね。だからぼろぼろになって親が子供を育てる。ぼろぼろになりますと、生き物は非常に平和的なんですね。私の友人の実験では、ひ乳ホルモンというのがありまして、このお乳の出るホルモンを動物に打ちますと、非常に平和的になるんですね。ところが老化が進んだ哺乳動物の脳から、体からはこのひ乳ホルモンがたくさん出てくるそうですね。だから孫がかわいいというのは、老化の1つの生理的現象だろうというのが、友人のその実験の、内分泌の実験なんですがね。子別れの儀式をすることが、老化によってできなくなったということも考えられますけれどもね。だから一般論としてはちょっと受け入れがたいんですが、非常に…。

井深 動物学的にたどっていくと、そういうことも出てくるんですね。

畑 自然のやさしさの一面かとも思います。

井深 先生は今何と何を飼っていらっしゃるんですか。

畑 私のところに大体350ぐらいいますが、種類は、ぼくは身近な動物だけです。犬、猫をはじめとして、キツネとか、タヌキとか、熊とか。

井深 食料でも大変でしょうね。

畑 はい、収入の全部を持っていかれちゃうんです。

馬のおっぱいのんだ

畑 子馬が、母親を認識するときに、私はよく競争するんです。要するに、ほんとにぼく母親になりたいわけですね。一人で母親になるのは簡単なんです、ローレンツみたいに。だから私はキツネの子を一匹手に乗るのを持ってきますね。これの母親になるのは非常に楽なんです。ただ、横にキツネの母親がいて、それに勝てるかという。

井深 コンペチターですな。

畑 そのために私は馬のお尻もなめるんです。なめ取って、糞もなめ取ってやるんです。

井深 とにかくなめることが一番の動物と人間に似たやつとの違いみたいですね。

畑 はい。ところが勝てないですね。やはり子馬は母親を慕うわけですね。母親の全体像みたいなものを見てますと、やっぱり母親は私よりも圧倒的に大きいんですね（笑い）。

井深 おっぱいのせいじゃないですか。

畑 いや、そうと思わないですね。ぼくがミルクやって飲みますもの。たまにはしぼってあげるんです、子馬に。それで勝てないんですね。信号と、やっぱり母親像というのを違うと思うんですね。信号は、子馬にたとえばポコならポコと名前をつけます。私が「ポコ、ポコ」というとぼっぼっぼと寄ってくるんですね。私を後追いしてくるわけです。「ポコポコポコ」というとどこまでも散歩するし、私が踊れば子馬も踊ります。ところが子馬にとって必要なのは、母親の大きさとか、においとか、そんなもんかもしれないなという、何か全体像が…。

井深 うん、それは総合であって、部分的じゃないんですね。赤ちゃんが母親慕うっていうのはすべてなんですね。

畑 だと思えます。するとローレンツはそこから信号の部分だけを…。

井深 1つだけをね！私はそれ賛成なんです。1つだけのあれをたまたま発見したという。

畑 ということじゃないかな、というふうに、最近少し考えています。

井深 それは1つのことじゃないですね。非常にオーバーオールなんですよ。

畑 ついでにその子馬の話をしますと、私は馬のお乳を飲むのが夢だったんですね。

井深 馬のお乳を飲むの？

畑 はい。で、最初は蹴られたり、突き倒されたりしたんです。なかなか親って飲ましてくれないんです。そこである種の子馬を育てましてね。その一頭だけ、赤ん坊から育てて、一緒に毎日、毎日顔見て、それが子供産み出した。そしたら乳房をぼくがくわえても何にも言わなくなったんですね。それでちゅっちゅとぼくが吸うわけですが、全然出ないんで

すね。

井深 ほう、出ないですか。

畑 そこへ子馬がぼくを突きのけて吸いにくるんです。子馬の口のまわりには、もやもやと感覚毛がついています。それを乳首につけたとたんにどーんと出てくるんですね。ぼくもそれでむせてね。ほんとうにうれしかったんですけど。やっぱり子馬が吸うということに対して母親がすごいお乳出すんですね。子馬が近づいてきて、吸う段になって、あんな乳首なんて不随意筋みたいなものが動いて、おっぱい出すんですね。びっくりしました。

井深 これは人間の場合でも何でも、先ほどおっしゃった“信号”があると思うんですがね。泣き声なんてのは1つの大きな信号だけど、しゃぶるとか、吸うとかということも、大変大きな信号だと思うな。乳房は幾つかあるわけでしょう。

畑 2つあります。一方の乳房を吸うと別の方もどんどん出てくるんです。

井深 ああ、そうですか。やっぱり、子馬の方がその点は利口だった、先生より（笑い）。

畑 ああいうのはすばらしいですね。どういう仕組みになっているんですかね。

セントバーナードとの勝負

井深 ところで先生の一番の目的というのは、どういうところにあるんですか。

畑 どうなんでしょう。ローレンツさんにお目にかかったときに、いろいろ話をしたんですけども、最後に、「あなたはこれから生きるときにテレなくていい」と言うんですね。

井深 もう、そのまんまに愛していけばいいと。

畑 はい。「生き物と同じ次元に立てるのは、人間の中でも、わりと少ないんじゃないかならうかと。ぼくはそういうものをあなたに感じるから、テレなくて生き物の側に立ってなさい」というようなことを言われたんですけど、やっぱりさすがだなと思ひまして。生き物好きですから、一緒にいたいですね。

井深 私にはね、「野生のエルザ」なんかナチュラルさにも、どうも脚色みが非常に出てくるんだけど、先生の場合は非常にそこいら辺が純なような気がするんですよ。ただ、スペシャリストじゃなしに、最もナチュラルリストですね。そうならねばならぬわけですね、動物を愛するというのは。

畑 いや、わかんないこといっぱいありますね。ぼくの場合は、明らかにしていくのが、ほんとに小さいことなんですけど、小さいこと1つずつわかっていくと楽しいこともありますね。

この2~3年は外国が多いですが、短期間いないというのは非常にさびしがりますね。それが動物の時間の認識です。この間、パラグアイへ行きましたが…。

井深 パラグアイの動物を観察に？

畑 はい。あそこにパピバラという動物がいますね。ネズミの仲間、大体60キロもあるんです。

井深 ネズミで 60 キロも…。

畑 昔はたくさんいたんですがね。そういうのが百、二百頭も群をなして、河辺に住んでいたという旅行記があるんですが。それを見たいと思ひまして、今度、初めて行ってきました。ちょうど 12 年ぶりの大洪水になってましてね。河辺に住んでるパピバラが追い出されて、人里に迷い込んできてるんです。それを一頭つかまえてもらひまして、一緒に住んでました。

井深 ネズミとですか。

畑 はい。ネズミのおぼけですね。非常にみんな危ないと言ったんですね、かみつくから。歯は非常に鋭いんです。ぼくは海外旅行すると必ず屋根裏とか、そういうところを借りて住んでますが、屋根裏部屋に放してもらって、その晩から一緒に住みました。

井深 ヘーえ。

畑 向こうの人は驚いていましたよ。ぼくが踊ると、ほんとにふざけてこうやって喜ぶんです。

井深 無心ということだけじゃ、とてもやれないと思うんだけど。

畑 いや、それはぼくは一種の才能だと思います。1 つだけ非常に極端な例をお話しますと、セントバーナードで飼い主をものすごくかむ事件が起こったんです。それを日本獣医大学というところでもらい受けまして、みんなで治そうと思った。ところがだれ一人近づけずに、投げなわを打ちまして、縛りつけて飼ってたんです。その中の一人が私の読者でして“あいつならできるだろう”と、挑戦してきたんですね。ぼくもそのかむ犬というのは、どんな精神構造かというのをやってみたくて、じゃ、送れって行って送ってもらったんです。

井深 何歳ですか、そのときは。

畑 それが 5 歳ぐらいなんです。雄で 90 キロ近かったんです。鉄のおりに入れられて来たんですね。前の日はものすごくこわかったんです。人をかむ犬というのはすごいです。かまれたらまずは致命傷を受けます。それで着きましたときには、ぼくはもう、いわゆる精神状態が非常によくなってまして…。

井深 よくなった、とは？

畑 要するに、どうでもいいやって気になるんですね。これにかまれて死ねば本望だという気になるんですね。「おりの戸を開ける」って言って、中に入っていたんです。ウーッと飛びかかってきたんですね。顔を相手の口の中に入れてやったんです。“かんでもいいよ”って。そしたら一発でしたね、それ一発。それからぼくの言うことは絶対服従。

井深 催眠術ですな、それは。

畑 そのセントバーナードがその夏に肩のハレモノが化膿しまして、私は「これはおれが手術する」と言って、麻酔なしで、ズブズブって切って、中のうみ出しました。そのときもセントバーナードの顔を私の顔にくっつけていました、いつかんでもいいように…。

井深 いつかんでもいいって。うーん。

畑 それで「ヒーッ」って言っただけで、手術させてくれましたよ。そんなもんです。それが

らかむ犬をずいぶん手がけました。全国から送ってくるものですからね。次にもまた、飼い主のお母さんと娘さんを大けがさせたセントバーナードが送られてきたんですね。2回目からは生き死にのことにならないと思ってますから、着いたとたんに「おい、来い」といってバツと正面から抱いちゃうんですね。それで私は犬にかまれたことはないんです。

象とわたし

井深 人間も少しお引き取りくださいよ。人間の方に始末の悪いのがいるからね（笑い）。インドなんかで、先生のお話だったかな、象使ってのは象に殺されるっていいですね。

畑 はい。私も5~6回殺されかけました。これが象の傷です。（と、首筋を見せる）象にくわえられて振り回されて…。

井深 やっぱり相当悪意ですか、それは。

畑 悪意です。もう殺そうと来ます。

井深 それでかかってくるわけですか。

畑 もうはっきり。周りに子供が100人いても、何にもしません。これを殺そうと思った人間にだけに向かってくる。

井深 そうですか。その象使いを殺すときもそうなんですか。

畑 そうです。

井深 積年の怨みですか。

畑 いいえ。順位をつけたいという時期があるんですね。

井深 そうですか。自分の方が、主人にね。

畑 ええ。1番身近にいるものとやっぱり順位争いをしちゃう。そのときはひどいです。ちょっとこわいですよ。そのときは逃げますけど、あとから腰が立たんですね（笑い）。くわえて振り回されて、足で踏みに来るんですね。モモを踏まれましてね、片方がだめになっちゃったんですね、そのとき。それで水の中だったからはって逃げて、ちょうど石の橋があったから、それで象が来られなくて助かったんですけど。いや、助かった、と思ったら腰が立たんのですよね。

井深 どういう原因からなんですか。

畑 それは私が象を買いまして、象使いにお金をあげて退職してもらいまして、私が象使いになったんです。象使いははじめナイフで象の皮膚を50センチくらい切るんですね、グッと深く。そしてその切り口を痛めつける。

井深 こっちの偉さを示す…。

畑 示すわけですね。ぼくはそれができないんですよ。私は友達でいたいと思いますから。そうするとなめられちゃうんです。

井深 人情を解さないんだな（笑い）インドの象は。

畑 それで何回もやられました。だから肋骨を折りましたし、親指は折ってますし、もうめち

やくちゃです、体は。ここの両ひじはパーフェクトにやられてます。こっちの肩は抜かれてるんです。

井深 その象のために？

畑 ほかの象に。

井深 どうしてそう象にご熱心なんですか。

畑 いえ、何でも好きなんです。だから体じゅういろんな動物のけがでいっぱいです。熊にあごをやられてます。これは牙の跡です。顔じゅう、体じゅう…もうけがなら負けません（笑い）。大体 400 ヲ所くらい牙の跡があります。

井深 それでその象は結局どうなりました。

畑 はい。ぼくの方法でしつけました。

井深 どういう方法で？

畑 友達になろうっていうことでしつけたんです。

井深 ふーん。

畑 「どうでもしてくれ」って言ったんです、最後に。「もう殺すなり何なりしろよ。おまえとおれは友達じゃないか」と言ったわけです。体投げ出したわけですよ。それで友達になりました。やっぱり象はえらいですよ。

井深 象はえらい。

畑 ぼくはやっぱり動物のそばに行くといつと自分がみじめでね。ほんとに小さいなと思いますね。すごいですよ、象は。あの存在感というか…。

井深 存在感…ボリュームだけではないんですね。ボリュームとウエート。

畑 ええ。こんなことがあったんですよ。ある象に“お手”を教えたんですね。それは政府の囲いの中で自由に生きてる象だったんですね。「お手を覚えるかな」と思ったら、2 回目で“お手”って覚えたんです。その象と遊びまして、それでもうそれっきり行かなかったわけですね。それで半年後にたまたまそこを通りかかったんです。そしたらある象がものすごく怒るんですね、ぼくを。そして後ろから来て、ぼーんと鼻で突き飛ばすんですよ。ぼくはふっ飛ばしちゃった。みんな「危ないから逃げろ」っていうんです。ぼくはほんとに襲ってくるから逃げたわけですが、逃げたってもう象にはかなわないですよ、早いから。ふっと振り返ると気配が違うんですよ、何か甘えてる…。ぱっと振り返ったら、どだどだどとやってきて、ぱっと“お手”をやるんですよ。

井深 うーん。

畑 “お手”をやってほしかった…。それに気がつきまして、「お手」って言うとはっとやるんです。100 回くらいやってましたよ（笑い）。うれしかったですね、あれ。

井深 どこですか、場所は。

畑 スリランカ。セイロンです。だから“お手をおまえさんが教えてくれたのに”…。

井深 一向その後やってくれないじゃないかと。

畑 そういうところは、象にいっぱいあります。

井深 スリランカに長くおられたんですか。

畑 300日くらいでした。1回にはないんですが…。それで帰ってきて私が寝言言うんですよ。象の寝言を（笑い）。それで女房が行ってこいと言うもんですからね。すぐ飛んで行くんです。象は子供の期間が長いですからね。たとえば犬でも8ヵ月でほとんど大人になります。象は13年かかります。

井深 13年！幼児教育の1番いいお手本だな。そうですか、13年ね。

畑 子供の心を持って時代が長いんですね。ですからほかの動物に会ったときと違う何か特別のものを感じますね。何と申し上げたらいいんでしょう。ちょっと自分で説明できないけど…。

井深 純粹さというか…。

畑 遊び好きというか、心が通じやすいというか。

井深 その象の場合なんかも、うんと小さいときと13年とでの違いは？

畑 年いくごとに違ってきます。年ごとに、行くたびに違ってきますね。ぼくは6年前から行ってますから。そのころ7歳ぐらいのが13歳ぐらいになっていますね。7歳ぐらいのときに行くと、一緒に遊ぶとめっちゃくちゃにされちゃうんです、こっちが。1時間遊ぶとかなりのもんですね。

井深 相当大きいんでしょう、13というと。

畑 13というと、私が立って背の1番上に届くかな、というくらい。ひなたぼっこしてると、必ずゆっくりやってきて、そしてあごの下に私を入れまして、そして鼻でずーっと体さわって行って、歌をうたってやるとうっとりして眠る。そんなつき合いができるようになると、非常に楽しくなります。

肥ってはいけない

畑 教育でしたら子馬を母馬からすぐ離しまして、馬として育てるとするのはものすごいむずかしいです。

井深 むずかしいですか。

畑 はい。私のとこで青年にやらせると全部失敗します。

井深 どうなるんですか、失敗っていうことは。

畑 わがままで、自墮落になり…。

井深 ああ、しつけですか。それはおもしろいな。

畑 青年たちはしかれないんですね。ぼくは動物を育てますときに、タブーをいっぱい置くんです、周りに。ソファーはかんじゃいけないとか、ここにおしっこしちゃいけないとか、寝るのはあそこだけだ、ということね。

井深 育つときにそういう習慣をつける、なれるような条件づけをするわけですね。

畑 はい。それで違反したらぶんなぐるんです、げんこつで、がばっと。そうするとすばらし

い動物だなんて思う動物が育ちますね。

井深 子供はやっぱり3代家族だの4代家族の中で、別におじいさんが怒らなくても、そういう雰囲気ってのは、ルールといったようなものはできているわけですよ。そのルールを守るということを自然にやっていけるような育て方というのが、いまの核家族じゃ欠けちゃってる。

畑 ほんとにいまの核家族じゃ教育できないですね。シカも子ジカをきちんと育てられないです。むずかしいです。しかるタイミングが。私、クマでも育てるときはほんとに命がけで、怒るときはかたわになるくらいぶんなくりますよ、丸太で。そうすると、やっときちんとした動物に育ちますね。

井深 そうか。動物を飼うというの、そういうトレーニングというか、しつけというものを含んだもので、愛がただであってはいけないんですね。

畑 はい。そのときに体ごとしからないと、効果はないですね。

井深 ローレンツさんの本の中にはあるんですが、動物を産まれたときからかわいがっていると、その動物として意識ってのがない場合があると…。

畑 ありますね。

井深 せきせいインコを8年ぐらい飼ってたんですけどもね。全然自分が鳥だという意識がないらしく、雌あてがってもだめなんですね。人間だと思ってんですよ。そういうことやっぱりありますか。

畑 はい。そういうときには私は雄を多くするんです。そうしますと雄同士で争いますでしょう。そうするとその動物らしくなる。

井深 自意識が出てくるんですね。

畑 闘争がものすごく大切ですね。

井深 ああ、そうですか。

畑 去年から苦労したのは、ヒグマをミルクから育てたんですね。去年5歳になりましたけど、見合いさして、全然だめです。うちのヒグマ舎はうんこは1つも落ちてないんです。それを反省しまして、ことしは糞まみれにしてやろうと、両方を。そしたら糞というのは非常に情報源ですから、野性動物の。ですからそれを糞まみれにしちゃったんです。そしたらことしはうまくいきました。

井深 人間がいいなと思うことは大したことじゃないんですね。

畑 綿羊とかラクダは、繁殖期は雄は自分で体におしっこをかけます。スプリンクラーと同じです(笑い)。ラクダは自分のおしっこをしっぽの先に受けてから、ピシャッピシャッと体にかけるんです。それで腐るとちょうどジャコウのにおいといいますが、香水のにおいになります。それを思い出しましてね、ことしは熊の巣はそのままにしておきましたら、体にうんこをこすりつけるんですね。

井深 パンダなんて、それをやったかな(笑い)。

畑 いや、案外わかんないものですよ。

井深 手入れして、きれいに洗っちゃってるかもしれないね。

畑 ぼくでさえ、というのはおかしいですけど、いままで一生懸命いきがってうんこ拾いましてね。

井深 相当ツーマッチメディカルだからね、いろんなことが。

畑 あんまり太らせ過ぎるというのも絶対いけないんです。馬なんかですと、繁殖させるときあばらが見えてなきゃだめですね。あばらが見えて、あばらにこうして手を置いてじっと目をつぶります。こう動かすとポロポロっていうくらいじゃないと……。しとっと脂肪を感じられるやつはだめ。

井深 動物というのは、自分がだめになって、後を残していくというのが、ほんとの姿で、じいさんも、ひいじいさんも、そこで同じにやるっていうことはないことなんだろうね。

畑 私はとにかく素人からのスタートだから、勉強するのがおもしろかったですね、この 12 年。ほんとおもしろかったです、毎日が。

おわり